
地球もどき

カレーライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地球もどき

【NZコード】

N1929M

【作者名】

カレーライス

【あらすじ】

24××年、天使は地球を攻めてきた。

人間、悪魔、天使

24××年、天使が地球を攻めてきた。

人間は、平和に暮らしていく、武器などはまったくもつていなく、代わりに自然エネルギーを利用した、『魔法』で対抗した。だが、天使は強く、人間はあつという間に倒されていった。

人間は、地球が爆発してしまう時のため、作っていた『空船』で宇宙へ逃げて行つた。

ここには悪魔が住む地底界。

悪魔であるギアは走つていた。

ギア「やばいな・・・早くしないと学校に遅れてしまう。」

その時足に何かが当たつたような気がした。

ギア「なんだこれは・・・」

足元には、古い本が落ちていた。

ギア「こんなもんほうつておこう。」

ギアは走つて行つた。そしてギアがいなくなつてから、本が風で開いた。その時、本が光つた。辺りにいた悪魔たちもそれに気付いた。

「のわつ！眩しい！？」

「いつたいなんのさ！逃げたほうが

だが悪魔たちはそんなことを言い終わるうち、悪魔たちは光に包ま

れていった。

ギアは学校についていた。門には生徒と思われる悪魔がたくさんいた。

ギア「やつとついたな・・・」

ギアはその時、後ろに光が迫つていることに気付かなかつた。ギアが気付くときにはもう遅かつた。

光が消えた後、地底界にはたくさんの悪魔たちが倒れていた。

そして1時間後、悪魔たちは目を覚まし、泣き始めた。

そしてギアも目を覚ました。

ギア「俺たちが本当は天使だったのか・・・憧れていた天使だったのか・・・」

ギアはその場を歩き続けた。次第に目から水滴が流れた。
悪魔たちはその夜も泣き続けた。

そして五年後、空船で旅をしていた人間たちは、ある星にたどりついた。その星は地球より10倍に大きく、青い海が見えた。
空船は着陸した。そこは草原だった。人間たちは宇宙服を着て外に出た。

すると、近くに動物の群れがいるではないか！

人間たちはヘルメットを脱ぎ、草原を走りまわった。近くにはきれいな川も流れていた。

人間たちは、そこで暮らすことに決めた。

この星の名前は地球もどきに決めた。

人間、悪魔、天使（後書き）

頑張つて書きたいと思つています

ビリタリムズ学校

ジリリリリリリ！

授業の終わりを告げるベルが鳴った。生徒たちは教室を出て行った。だが、一人、出ていかない者がいた。

生徒「おい、クレシェンド！起きろー移動するぞー！」

クレシェンド「・・・どこに？」

生徒「攻撃魔法教室だ。」

クレシェンド「・・・はいはい。」

クレシェンドは生徒と一緒に教室を出た。

ここは地球もどきのビルート地方にあるビリタリムズ学校。国語や数学などとともに武芸や魔法を学ぶ授業もしている。

クレシェンド「それにしても疲れたなー」

生徒「ただ寝てただけだろ。」

クレシェンド「寝るのも疲れるんだよ。ヴィータ。」

ヴィータ「じゃあ毎日疲れっぱなしじゃねえか。」

クレシェンド「寝心地が悪いから疲れんだよ。」

ほかの廊下から生徒が歩いてきた。

クレシェンド「よつ、フィリスト。」

フィリスト「ああ。」

クレシェンド「お前はどこに行くんだ？」

フィリスト「武芸教室だ。」

クレシェンド「そうか。じゃあな。」

フィリスト「ああ。」

フィリストは右の廊下へ消えていった。

クレシェンド「それにしてもフィリストってすげえよな。」

ヴィータ「そうだな。全科目中全てがベスト3に入ってる。ある意

味天才だな。」

クレシェンド「俺もそうなりてえな・・・」

ヴィータ「寝なかつたら入れるかもな。」

二人は立ち止った。

クレシェンド「ここ・・・だよな。」

ヴィータ「じゃあ行くぞ・・・」

クレシェンド「わかつた。」

ヴィータ「ミーマム！」

ヴィータがそう言つと、一人は消えてしまった。いや、小さくなってしまった。一人は米粒のような大きさだった。

クレシェンド「こんな状態で学校を歩いてみたいな・・・」

ヴィータ「お前は踏みつぶされたいのか。」

二人は壁にある穴へ入つた。

クレシェンド「なんでギミウト先生はネズミが住んでいたといひを教室にするのかな。」

ヴィータ「そんなもん知るか。」

二人は闘技場らしき所に出た。そこにはほかの生徒がたくさんいた。

クレシェンド「やべ、遅れたな。」

ギミウト「よーし、全員そろつたようじやな。今日はバトルじゃ。生徒たちの前に檻に閉じ込められた蜘蛛が出てきた。」

クレシェンド「やつぱ、でけえな。」

ヴィータ「正確には俺たちが小さいんだよ。」

クレシェンド「そんなもんわかつてらあ！先生！俺がやるー！」

ギミウト「ほう、それではやつてみなさい。」

檻が消えた。蜘蛛がクレシェンドを威嚇している。

ギミウト「念のため、お前たちにはバリアをしておこう・・・バリア！」

生徒たちを何かが囮つた。

蜘蛛がクレシェンドに突進してきた。

クレシェンド「ファイア！」

クレシェンドの前から炎がでていく。蜘蛛はダメージを喰らつて、
るようだつた。

だが蜘蛛は怯まなかつた。蜘蛛は糸を出してきた。

ギミウト「あれに当たると終わりじゃぞ！」

クレシェンド「ブリザド！」

次は蜘蛛を冷気が襲つた。蜘蛛の出した糸が固まつた。蜘蛛は怒つ
ていた。

クレシェンド「そこだ！サンダー！」

蜘蛛の上から雷が落ち、蜘蛛はもう動かなかつた。

ギミウト「よくやつた。次はお前だ。ヴィータ。」

ヴィータ「ええ~~~~~！いやですよ~~~~~！」

クレシェンド「がんばれ~~~~~！ヴィータ~~~~~！」

ヴィータ「後でぶつ殺すからな・・・」

ギミウト「お前の対戦相手はダンゴムシじや。」

ヴィータ「なんだ。ダンゴムシか。楽勝だな。」

ギミウト「言つとくけどここつは凶暴化させとるからな。」

ダンゴムシは丸まり、ヴィータに転がつてきた。

ヴィータ「それを先に言え~~！」

ズドウウウウウウウウウウウウウウウン~~~

ダンゴムシは壁に激突した。

ヴィータ「そ」だー口ツク！』

ダンゴムシの下から突起物が出た。ダンゴムシは上空に飛ばされた。

ヴィータ「エアロ！」

ダンゴムシはどこからか吹いてきた風で吹き飛ばされた。

ダンゴムシももう動かなかつた。

それから、何度も生徒たちはバトルをした。

そして全員がバトルを終えた。落ちこぼれであるピギーを除いて。

ピギー「い、いやだよ！バトルなんか！」

ギミウト「大丈夫じゃ、みんな無事に生きてるんじゃぞ？」
ヴィータ（全員が絶対に安全の授業をしろよ・・・無理だと思つけど。）

ピギーと対戦するはずの蟻がピギーに威嚇をしている。ピギーは震えていた。

ギミウト「もういい。蟻を逃がしてやろう。」

生徒は全員笑っていた。ピギーは泣いていた。

ギミウト「これで授業を終わりにする。」

生徒は闘技場を出て言った。生徒たちは魔法の『ナチュラル』を唱えて元の大きさに戻っている。

ヴィータ「ナチュラル！」

二人も元の大きさへ戻った。

キャラクター紹介

クレシェンド

年齢15歳

身長167cm

体重59?

人間の少年。髪は黒い色で青い瞳の持ち主。学校で国語などはすぐ
に寝るが、運動系の授業はなんでもやる。この物語の主人公。

ヴィータ

年齢15歳

身長166cm

体重58?

人間の少年。髪はクレシェンドと同じ黒色で黒い瞳の持ち主。クレ
シェンドの親友。クレシェンドに目覚まし時計代わりにされている。

ギア

年齢?

身長?

体重?

悪魔の青年。髪は紫色で青い瞳の持ち主。天使に憧れている。

ダルグ

年齢15歳

身長167cm

体重59?

人間の少年。髪は茶色で黒い瞳の持ち主。武芸の成績は?1。いつ
もアクションサバイバルをやっている。大食いチャンピオンである。

ピギー

年齢15歳

身長159cm

体重61?

人間の少年。髪は茶色で黒い瞳の持ち主。落ちこぼれ。

ボスードライド（校長）

年齢 74歳

身長 185cm

体重 75?

人間の老人。白髪で眼鏡をかけている黒い瞳の持ち主。ビリタリムズ学校の校長。副校长のピストに信頼を寄せている。

ピスト

年齢 64歳

身長 172cm

体重？

人間の老婆。茶色い髪でいつも帽子をかぶっている。ビリタリムズ学校の副校長。なぜか黄色い瞳をしている。

キャラクター紹介（後書き）

物語が進むにつれて、更新していきます。

学校での一日

クレシェンドは次の教室に行くためにヴィータについて行つていた。

クレシェンド「次は何の授業なんだ？」

ヴィータ「ブリザドチームと合同の社会だ。」

ビリタリムズ学校では、生徒をクラスではなく、チームで分ける。チームは五つあり、ブリザドチームはその一つだ。ちなみに、クレシェンドとヴィータはサンダーチームだ。

クレシェンド「社会か・・・ちょっと保健室に行つて枕を借りてくれるわ。」

ヴィータ（絶対断られるな・・・）

クレシェンドはヴィータと別れ、何分か経つた後、クレシェンドは医務室に着いた。普通なら医務室は生徒のうめき声でうるさいが、静かだった。

クレシェンド「すいませーん。」

中はだれもいなかつた。

クレシェンド（・・・ 拝借しておひづ）

クレシェンドはベッドにあつた枕をとり部屋を出た。

五分後、クレシェンドは教室に着いた。先生が怒鳴つている声が聞こえた。

クレシェンド「またあのうるさい先生か・・・眠れない授業になりそうだな。」

ガラガラガラ・・・

クレシェンド「遅れました〜」

教師「遅いぞ！ またお前か！ いつもいつもお前はもう

クレシェンドは教師の言葉も聞かず、席に座った。

「

教師「おい！聞いてるのか！」

クレシェンド「聞いてますよ。」

教師「それでは続きだ。偉大なる科学者ビースは薬草と毒の作用のある薬をませ

「クレシェンドはいつも、そりしてゐるね。」

隣りから女が話しかけてきた・・・ミアだ。

クレシェンド「ミアか・・・あいつもだ。」

ミア「だから成績が上がらないのよ。」

クレシェンド「別に上がらなくてもいい。」

ミア「ふーん」

そして授業が終わり、ブリザドチームの生徒は帰つて行つた。

ミア「じゃあね。」

クレシェンド「おう。」

ヴィータ「ラブラブだね。」

クレシェンド「なー？てめえ！！」

ヴィータ「冗談だよ。疲れなかつたそうだね。」

クレシェンド「あの先生がうるせえからだ。」

ヴィータ「ほかの理由もあるんじゃないかな？ずっと話したいとか・

・・・

クレシェンド「殺すぞ」

ヴィータ「「めん」「めん！」

クレシェンド「次はどこだ？」

ヴィータ「武芸教室だよ。」

そして全ての授業が終わつた。

クレシェンド「やつとおわつたか・・・」

ヴィータ「ほとんど寝てたくせによく言えるね。」

二人が歩いていたら前から年上の生徒がやつてきた。

クレシェンド「よう、チームリーダー。」

チームリーダーとは、各チームのリーダーである。多分わかると思うが。

チームリーダー「早く休憩室に戻るよ！」。「

クレシェンド「はいはい。」

チームリーダーはどこかへ消えていった。

ヴィータ「じゃあ休憩室に戻るぞ。」

何分か経つた後、二人は立ち止った。ヴィータはそこにあるドアのパスワードに何かを入力した。

ドアが開いた。ドアには『サンダーチーム用休憩室』と書いてあった。

中には生徒がいた。生徒たちは、話をしていたり、本を読んでいたり、アクションゲーム、『アクションサバイバル』をやっていたりしていた。アクションサバイバルとは学校で流行りのゲームである。

?「よう、クレシェンド！ヴィータ！」

クレシェンド「ん？ああ、ダルグか。」

ダルグ「一緒にアクションサバイバルやらねえか？」

ダルグは、もうすでにコントローラーを持つていた。

クレシェンド「いや、いい。」

ヴィータ「じゃあ、俺がやるわ。」

ダルグ「よつしゃ！やるか！」

ダルグはクレシェンドと同じく、ほとんどの授業でいつも寝ている。武芸だけは得意であり、武芸の成績ではいつも1位である。

ジリリリリリリリリリリリリ！

ベルが鳴った。

ダルグ「・・・」

ヴィータ「・・・」

ダルグ「行くか・・・」

ヴィータ「・・・おう。」

ダルグとヴィータは休憩室を出て行った。ほかの生徒も次々と出て行った。

クレシェンド「なんでこの部屋には時計がないんだよ・・・」

クレシェンドも休憩室を出て行つた。

クレシェンドが歩いていると、ほかのチームの生徒たちもやつてきた。だが、来てほしくない奴もいた。

・・・ゼルだ。

ゼルは、クレシェンドを見ると笑つた。

ゼル「よう、おバカさん。不気味な力を持っている悪魔の息子め！」
クレシェンド「俺はぜつてー悪魔の息子じゃねえ！ただ変な印が腕についてるだけだ！」

ゼル「どうかな・・・」

ゼルは笑いながらも、歩いていった。

クレシェンドは、なぜか、奇妙な印が腕についている。だが、ほかの生徒たちは気にしていない。ゼルを除いて。

生徒たちは、大広間らしい所に着いた。テーブルが100～150個はある。

クレシェンド「さて、座るとするか。」

クレシェンドは手前のイスに座つた。ヴィータやダルグも席に座つた。

大広間の奥に、いつもと同じように眼鏡をかけた校長が座つている。どうやら、ほかの教師と話してゐようだつた。

ダルグ「いつか、あそこに座つてみたいな・・・」

ヴィータ「・・・」

クレシェンド「・・・」

ダルグ「無視かよ。」

その時、机に皿が運ばれた。皿の上にはステーキなどがある。

そして1時間後、生徒たちは夕食を食べ終わり自分のチームの休憩室へ戻つて行つた。

クレシェンドたちは廊下を歩いていた。

ダルグ「食つた食つた！」

クレシェンド「よくあんな量食べきれるな。」

ヴィータ「さすが大食いチャンピオン。」

ダルグは以前、大食い選手権で優勝した。

クレシェンドたちも休憩室へはいって行つた。

ヴィータ「やつとアクションサバイバルができるな。」

ダルグ「絶対勝つてやるぜ！」

クレシェンドは休憩室の奥にある寝室へ向かい自分のベットへ向かつた。

クレシェンド「寝よう・・・」

クレシェンドは寝てしまった。

こうしてまた、学校での一日が終わつた。

スライムゴーレム

ヴィータ「おい、起きろ。」

ヴィータは午前6時にクレシエンドを起しきりやつとしていた。

クレシエンド「う・・・」

ヴィータ「やつと起きたか。」

クレシエンド「・・・よう、用覚まし時計。」

ボカッ！

クレシエンド「痛いなあ用覚まし時計。」

ヴィータ「ファイアでもしてやろうつか？」

ヴィータは笑った。

クレシエンド（ヤバい・・・あれは殺意を持っている・・・）

クレシエンド「分かつた！起きるよー。」

ヴィータ「分かつたならい。」

クレシエンド（・・・危なかつた。）

クレシエンドは、一回、ヴィータが本気で怒ったことを今でも覚えている。

それは五年前。

ヴィータはまだ1年生だった。ある日、ヴィータが偶然いじめっ子にぶつかって何回も殴られたという。

だが、ヴィータは怒らなかつた。それほど我慢強いのだろう。だが、何回も殴られているうちに、ヴィータは笑つた。そして、まだ習つていらない魔法を連発した。ヴィータは先生に止められたが、いじめっ子は全治1年の重傷だつた。今はそのいじめっ子はほかの学校で暮らしているという。

クレシエンドはこれを思い出し生きててよかつたと思つた。

クレシエンドは寝癖を直し、休憩室へ向かつた。

生徒たちは、朝でもにぎやかだった。

その時、チームリーダーが休憩室のドアを思いつきり開けて（ピギーがドアに鼻を打ち付けた）言った。

チームリーダー「みんな！早く大広間へ避難しろ！外にスライムゴーレムがいるぞ！」

スライムゴーレムとは、魔物で一番弱いと言われるスライムが集まつて合体した姿であり、かなり強い。

チームリーダー「俺についてこい！」

生徒たちはぞろぞろとチームリーダーについて行つた。

クレシエンド「俺たちが倒せれば報酬もらえるかな？」

ヴィータ「馬鹿かお前は。」

生徒たちが大広間へ歩いていると、どこからかスライムゴーレムが襲いかかってきた。

チームリーダー「サンダー！」

雷が、スライムゴーレムの目に当たつた。

チームリーダー「校長先生！」

校長「分かつておる！ファイアボール！」

どこからか火の玉が飛んできた。それはスライムゴーレムに当たつた。だが、スライムゴーレムはまだ息があった。

校長「もうすぐ、魔力切れじゃな・・・」

そこに、校長先生と同じような年の教師がやつてきた。

校長「すまない、ピスト先生。」

ピスト「大丈夫です！後は任せください！」

スライムゴーレムはまた生徒たちに襲いかかった。

ピスト「つ！危ない！」

フィリスト「ヴィンギング！」

スライムゴーレムが吹き飛ばされた。近くにフィリストが立つていた。

フィリスト「早く逃げて！・・・つ！」

ドガアアアアアアアアアアアアアアン！

フィリスト - ぐはつ・・・

卷之三

した。

ヒノヒヤめながい危険で可

クレシェンドはスライムゴーレムの腕を駆け上がり、顔を切り裂いた。

ステイムホールは暴れた。ケレジンは吹き飛ばされてしまひた。そして氣を失つてしまひた。

ヴィータ「クレシンドー！」

ケレジニアトに重力なし

「ビータはスマートマシンから離れて進化した。」

ヴィータ「ファイア！ブリザード！サンダー！ロック！ウォータ！」

スリーハム「レムを次々と魔法が無いかかる
せうつて、まつて」

ヴィータ・ノメットの本を読むのが何よりも好きです。

નુદી - ૧૦

校長が叫ぶどごーからか光が出てきてヴィータを貫いた。ヴィータは貫かれた瞬間、失神してしまった。

スライムゴーレムはもう息絶えたようだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1929m/>

地球もどき

2010年10月11日02時37分発行